

2021年9月12日（日）／説教者：神谷武宏

説教：「神よ、あなたのみがご存じです」

聖書：エゼキエル書37：1～14

「魂魄の塔」は、1946年2月27日に建立式が行われた。戦後初の追悼式になる。この「魂魄の塔」は、初めから追悼式を目的として、散乱する収骨を行ったのではない。同年1月、収容所に押し込められていた真和志村（現那覇市おもろ街）の住民4300人が真壁村（現在の糸満市）米須に移動させられた。村民は戦後の破壊尽くされた土地で、まずは食料の生産にあたらなければならなかった。しかし土地を耕すにも、まだ頭髪や皮膚が付着したままの遺骨が散乱し、中々作業が進まない。収容所の中で村長に選ばれた金城和信さんが、米軍に収骨作業の許可を願った。米軍は当初その願いを許可しなかった。遺骨を集めることによって反米感情、暴動が起きかねないを見たのである。それでも懇願し続ける中でようやく許可を得て、村民による収骨作業が始まる。遺骨は一箇所に集められ、一つの大きな骨の山が築かれた。遺骨は3万5千体にも及び、その納骨堂には沖縄人のみならず、日本軍、米軍、韓国・朝鮮人の遺骨も同じく納骨した。村長の金城さんは「今は、敵も味方もない」との信念をもって納骨する。これは世界に類例をみない戦争記念碑である。

今朝のエゼキエル書は、あの福音書に記されているキリストの十字架と復活の出来事が見えて来るようだ。「わたしはお前たちの墓を開く・・・わたしが墓を開いて、お前たちを墓から引き上げる」（12、13節）とは、まさにキリストの復活の出来事を思い起こす。戦争という絶望、十字架という絶望の中で、「墓を開く、墓を開いて、お前たちを墓から引き上げる」と神は言う。キリストもまた、そのようにして復活が成される。ここは、どうにもならない絶望、苦難の悲劇の中で「生きる」ということを強く語っている。

神は、預言者エゼキエルに言う。「人の子よ、これらの骨は生き返ることができるか」と。そう聞かれたエゼキエルは、「主なる神よ、あなたのみがご存じです」と答えた。エゼキエルは精一杯の“祈り”の言葉として、絶望に満ちた戦後の瓦礫と散乱する骨のおびただしい数に打ちのめされそうな状況の中で、神に委ねるように「あなたのみがご存知です」と答えた。これは神への祈りである。私たちには、絶望にしか見えない世界の中で、神に委ねて生きる希望が与えられている。それは、十字架と復活の希望に繋がる。

沖縄戦の遺骨は、未だ収骨は終わっていない。政府はその遺骨が埋まる南部の土地を辺野古新基地建設の海上埋め立てのために使うという。この行為がどれほど罪深いことか。戦争で亡くなった方々を再び戦争のために利用しようとしている。死んでもなお戦争に駆り立てるのか！と、怒りを覚える。神は骨となった人々を

なお生かそうとし、なお希望をお与えになるのに対し、日本政府の行為とは余りにも真逆にある。私たちはしっかりとこの状況を監視する必要がある。(神谷)